

聴覚障害生徒のキャリア発達に関する事例的検討

雁丸 新一

本校高等部生徒のキャリア発達を支援するため、岩手県の3つの公立小学校を本校の教員と専攻科の生徒が訪問し、聴覚障害理解教育の授業と校歌の手話表現作成活動を行った。この活動を通して、生徒は聴覚障害や手話についての理解を深めていくとともに、手話や手話を通じた活動に積極性や自信をもっていく様子がみられた。これらのことから、聴覚に障害のある生徒のキャリア発達や形成においては、手話や聴覚障害の理解やこれらを題材とした活動が重要な役割を果たしていることが示唆された。

キー・ワード：聴覚障害 手話 障害認識 キャリア発達 専攻科生徒

1 はじめに

近年、学校教育においては、キャリア教育の推進や充実が求められている。キャリアとは、「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」とし、キャリア教育については、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と定義している（文部科学省，2004）。また、キャリア教育においては、キャリア発達に関わる諸能力として、人間関係形成能力（自他の理解能力，コミュニケーション能力），情報活用能力（情報収集・探索能力，職業理解能力），将来設計能力（役割把握・認識能力，計画実行能力），意思決定能力（選択能力，課題解決能力）の4領域8能力が例として示されている（国立教育政策研究所生徒指導研究センター，2002）。

特に、特別支援学校（聴覚障害）（以下、聾学校）においては、早期の教育から卒業後の支援までを見据えたキャリア教育が重要となっている。しかしながら、多くの聾学校では、キャリア教育が進路指導のなかに位置づけられていること、キャリア教育の一環として、児童期以前から心理面での発達やコミュニケーションに関して育まれるべき課題であることなどが指摘されている（石原，2010）。また、聾学校のキャリア教育については、自立活動だけではな

く、あらゆる教育場面や生育環境の中で意識されるべきであること、幼児児童生徒の将来像をイメージし、指導や支援を行おうとする教師の意識が必要であること、一般的な児童や生徒の発達課題である4領域8能力は同一であるが、さらに5番目の領域として、障害啓発能力（障害認識，情報保障に関する知識）があることも指摘されている（石原，2014）。

一方、平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による東日本大震災の被災地では復旧や復興に向けてさまざまな工事や支援等が進められているものの、市街地整備や学校建設等の工事が大幅に遅れている地域もある。例えば、岩手県上閉伊郡大槌町の町立大槌学園小学部は仮設校舎、大船渡市赤崎町の市立赤崎小学校は隣接する市立蛸ノ浦小学校の一部を仮校舎として使用している（Fig. 1, 2）。



Fig. 1 大槌町立大槌学園小学部・中学部仮設校舎

このような状況のなかで、被災地の児童が少しずつ気持ちを持ち直し、将来は地域の復興の担い手となって活躍するための援助や、故郷の素晴らしさを再確認できるような働きかけ等が必要であると考えている。

これらのことから、被災地域学校の児童、教職員への支援等のため、地域の名勝や伝統文化を題材とする絵画活動を実施するとともに、大槌町立大槌学園小学部の要望により、筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下、本校）専攻科生徒及び本校教員による聴覚障害理解教育の授業、及び訪問した3校の校歌の手話表現を作成し、DVDに収録する活動を実施した。

2 目的

本研究では、小学生を対象とした聴覚障害理解教育の授業、及び小学校校歌の手話表現作成活動を通して、聴覚に障害のある生徒のキャリア発達、特に、障害の認識や、障害啓発活動による自己効力感の向上を目指した活動の成果について報告する。

3 方法

(1) 聴覚障害生徒

本校高等部専攻科の女子生徒（以下、生徒）であった。生徒は幼稚園から本校に在籍しており、主なコミュニケーション手段は口話と手話の併用であった。口話については、補聴器による聴覚活用と読話の併用により、相手の話を読み取ることがある程度



Fig. 2 大船渡市立赤崎小学校仮校舎

可能であり、発音や発語も比較的明瞭であった。

一方、授業などでは消極的な面や社会的自立・コミュニケーションなどに対して不安を感じている様子もみられた。

(2) 訪問校・対象児

聴覚障害理解教育の対象は、岩手県上閉伊郡大槌町立大槌学園小学部4年生の児童60名であった。校歌の手話表現作成については、この学校の他に、大船渡市立赤崎小学校・市立蛸ノ浦小学校の校歌を対象とした。

(3) 実施時期

3校への訪問は、平成27年8月19日から21日に行われ、大槌学園小学部での聴覚障害理解教育の授業は、20日に行われた。また、訪問した3校の校歌の手話表現の収録は、当該年度末に行われた。

(4) 資料

聴覚障害理解教育の授業については、授業のビデオ映像、及び生徒による感想を基に、また校歌の手話表現作成活動については、教員による観察の記録と生徒による感想を基に、この活動の成果をまとめた。

4 結果と考察

(1) 聴覚障害理解教育の授業

聴覚障害理解教育を目的とした聴覚障害と手話についての授業では、まず授業者である生徒と教員が①自己紹介を行った。次に、生徒が中心となって②補聴器、③聴覚障害、④口話について説明し、⑤手



Fig. 3 聴覚障害理解教育の授業の様子

話単語の意味を当てるクイズを行った (Fig. 3)。

授業の内容については、生徒自身が聴覚障害や手話についての理解をより深められるようにするため、生徒が中心となって考え、教員は必要に応じて、内容の準備や児童への伝え方等についてのアドバイスをを行った。また、授業では、生徒はホワイトボードや事前に用意した文字カードを利用し、教員は必要に応じて、生徒や児童の発言の通訳を行った。

その結果、授業者である生徒は、授業内容の準備や実際の授業を通して、聴覚障害や手話のこと、教えることの難しさ、小学校や小学生の様子などについて学び、また授業終了後には大きな達成感をもつことができた (Table 1)。

Table 1 聴覚障害理解教育の授業についての感想

- ・「授業を引き受けることになり、とても緊張していましたが、やってよかった。」
- ・「授業の準備を通して、手話（手話の単語を十分に知らないの）や聴覚障害について調べることができて、よかった。」
- ・「子どもたちが一生懸命話を聞いてくれたので、よかった。」
- ・「すごく元気に参加してくれてよかった。」
- ・「子どもたちの声がとても大きな声でびっくりした。」
- ・「手話当てクイズでは子どもたちと盛り上がる事ができて、楽しかった。」
- ・「また、やってみたいと思いました。」

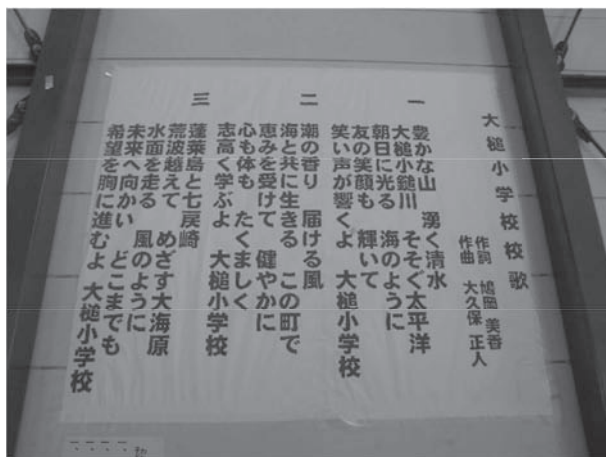


Fig. 4 大槌町立大槌学園小学部校歌

(2) 校歌の手話表現の作成活動

生徒と専攻科生徒 5 名及び本校教員が、3 校の校歌の歌詞とリズムを基に、歌詞の意味に相応しい手話表現を検討した (Fig. 4~6)。その際、生徒は、日常的に使用していないことば（例えば「水面」「仰ぐ」「うねり」）などについて辞書を用いて意味を調べ、必要に応じて、本校の他の生徒と手話表現について相談する場面もみられた。

また、校歌には地名などの固有名詞が用いられることも多く、これらについては、教員が大槌町在住の聴覚障害者に手話表現についての教示を依頼した。回答は手書きによるイラスト入りの FAX により寄せられた (Fig. 7)。

歌詞に用いられていることばの手話表現を決めた後、リズムに合わせるため、手話表現の速度や繰り返しなどについて検討し、手話表現を決定し、収録した。

Table 2 校歌の手話表現作成活動についての感想

- ・「校歌のことばやリズムが難しくて大変だったが、小学校の校歌を知ることができて、よい経験になった。」
- ・「(校歌をきっかけにして) 手話を覚えてもらえたら、うれしい。」
- ・「これからも、(自分が) できることやっていきたい。」
- ・「(聴覚障害理解教育の) 授業と校歌の (手話表現作成) 活動は、とてもよい経験になった。」

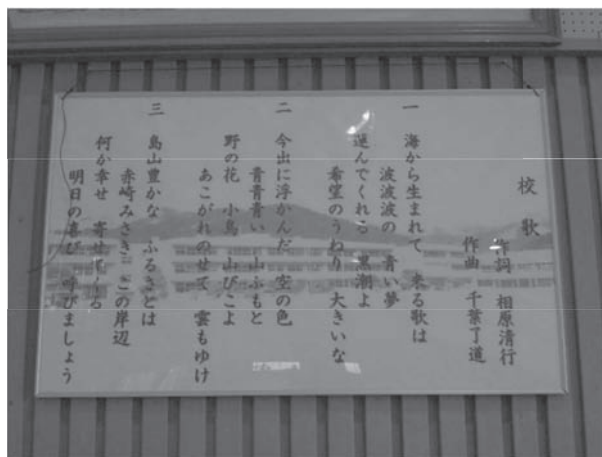


Fig. 5 大船渡市立赤崎小学校校歌

このような活動の結果、生徒は、校歌の手話表現の検討を通して、日常的に使用していないことばや手話について学び、また、手話や手話を通した活動に積極性や自信をもっていった (Table 2)。

5 まとめ

先の石原 (2014) の指摘にもあるように、自己の障害の客観的な理解や障害啓発能力などの育成が聴覚障害生徒のキャリア発達にとって大切な課題である。本研究では、小学生を対象とした聴覚障害と手話に関する授業、及び小学校校歌の手話表現作成活動について、授業のビデオ映像や教員による活動の記録、また生徒の感想を基に、特に、聴覚に障害のある生徒のキャリア発達の観点から検討した。

小学生を対象とした聴覚障害理解教育の授業では、生徒は聴覚障害や手話について教えるという経験を通して、より理解を深めることができたものと思われる。また、小学校校歌の手話表現作成活動においても、手話についての理解を深め、特に、手話や手話を通した活動に積極性や自信をもっていく様子がみられた。これらのことから、聴覚障害生徒のキャリア発達や形成においては、聴覚障害や手話についての理解やこれらを題材とした活動が重要な役割を果たすことが示唆された。

本研究の事例においては、聴覚障害や手話についての理解や、これらを題材とした活動が生徒のキャリア発達や形成につながったものと思われるが、聴覚に障害のある生徒は、能力や特性での個人差がた

いへん大きく、キャリア発達や形成においても、一般の生徒に比べて、より多様であり、指導においてもきめ細やかな配慮が必要であると考えられる。今後、キャリア教育をより広い観点から捉え、聴覚に障害のある幼児、児童、生徒のキャリア発達や形成に関する実践や研究の蓄積が必要であると思われる。

〔付記〕

本活動は、筑波大学社会貢献プロジェクト事業の一環として実施した。

また、本研究の一部は、筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要第 38 巻において報告した。

〔参考文献〕

- 石原保志 (2010) 聾学校におけるキャリア教育—児童生徒の心理的発達と就労レディネス—. 聴覚障害, 65 (714), 4-8.
- 石原保志 (2014) キャリア教育について—聾学校高等部における実践の提案—. 第 48 回全日本聾教育研究大会 (兵庫大会) 姫路聴覚特別支援学校高等部授業研究会資料.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2002) 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について (調査研究報告書).
- 文部科学省 (2004) キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書.

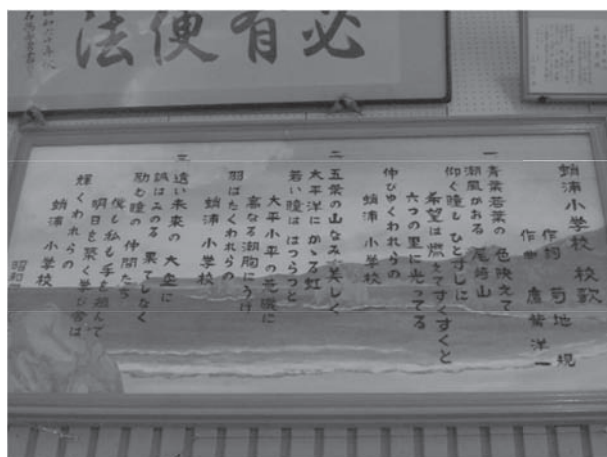


Fig. 6 大船渡市立蛸ノ浦小学校校歌

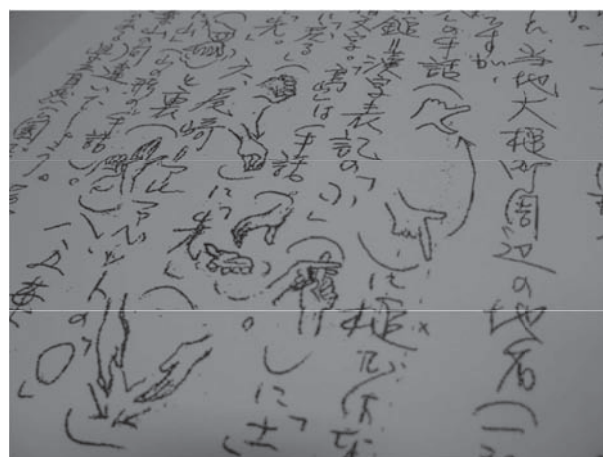


Fig. 7 地名などの手話が示された FAX の一部